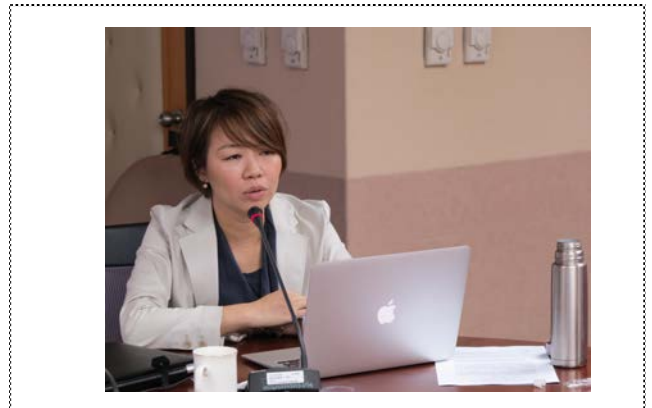


大学名	東京大学		
University	The University of Tokyo		
外国人研究者	張文薰		
Foreign Researcher	CHANG, WEN-HSUN		
受入研究者	藤井省三	職名	教授
Research Advisor	FUJII, SHOZO	Position	Professor
受入学部/研究科	大学院人文社会系研究科		
Faculty/Department	Graduate School of Humanities and Sociology		

<外国人研究者プロフィール/Profile>

国籍	台湾
Nationality	Taiwanese
所属機関	台湾大学台湾文学研究所
Affiliation	National Taiwan University
現在の職名	副教授
Position	Associate Professor
研究期間	2014年7月5日～9月10日
Period of Stay	July 5, 2014 ~ September 10, 2014
専攻分野	近現代東アジア文学
Major Field	Modern East Asian Literature



ワークショップにて研究報告

<外国人研究者からの報告/Foreign Researcher Report>

<p>①研究課題 / Theme of Research</p> <p>「20世紀における流浪、旅行、留学と東アジア文学の研究」 20世紀に入って以来、国境など伝統と文化を隔離する境界線はいよいよ曖昧となっている。しかし人間の感情とそれによる芸術的な表現は、空間的距離の短縮に伴い一様化しているとは思われない。誤解、疎遠そして融合あるいは断絶は、個人間の交流からやがて国家民族の間の相互認識にまで発展して行き、新たな近現代文学の風景を織り成しているといえる。本研究は、交通手段とIT技術などが情報交換の効率を大きく向上させ、ネットがすでに文学を生み出す一つの有力な「場」となった現在の東アジア文化状況を念頭に、20世紀前半に日本、中国、台湾を旅行、留学、移住した知識人と文学者の足跡を、それぞれの文体と文学史的位置とに照らして「移動」の可能性と境界を考えるものである。</p>
<p>②研究概要 / Outline of Research</p> <p>本研究を実行するには、これまでの日本における東アジア知識人の精神史研究を把握したうえ、作家たちの文学資料館、旅先や出身地の郷土資料館などで調査を行い、その移動した経緯と経験を実際のテキストとを対照する。さらに各地の文学関係者との交流をはかり、地域文学の成果と可能性について意見交換し、文学史的空間を拡張する必要がある。そのような過程において、小説のみでなく、ドキュメンタリー、ノンフィクションと文学の関連性を考えることも本研究の重点にしたい。</p>
<p>③研究成果 / Results of Research</p> <p>今回は、日本近代文学館ほか、山梨県にある「三島由紀夫文学記念館」、「徳富蘇峰記念館」へ訪問し、大きな収穫を得られた。三島由紀夫の学生時代企画展では、学習院時代の作文と文学修行についての資料が、国家教育と文学者人格養成との間の矛盾や対立をあらわにしたものである。また、鷗外の子息である森於菟が台湾帝国大学医学部在任中について描いたエッセイ『毫碌寸前』、台北高校卒業生の文集などを入手したことは、今回一番大きな成果だといえる。近代化と帝国主義の癒着関係は、植民地出身者の帝国巡礼および、帝国出身者の植民地経験の両側からアプローチすることができれば、一層「帝国」と「知識」の葛藤が明らかになる。</p>
<p>④今後の計画 / Further Research Plan</p> <p>1、植民地台湾から内地日本への留学先は、公立大学とくに帝国大学の場合が多いと思われたが、実際学習院のような貴族育成所や、同志社のような宗教関係の学校も選択肢に入れられたことがある。このようなルートはいかにでき、またいかなる入学資格が要求され、同窓会などの組織ができたのかを調査することにより、「知識人」のメカニズムを明らかにすること。 2、植民地に赴任、就学に来たいわゆる「内地人」が植民地経験より、引き揚げ経験を多く語った傾向がみえる。「引き揚げ」はその植民地記憶の中軸として組み立てることを、ポストコロニアルの視点から分析し、日本帝国の境界を論じること。</p>

<受入研究者からの報告/Research Advisor Report>

①研究課題 / Theme of Research

「20世紀における流浪、旅行、留学と東アジア文学の研究」

外国人研究者の張文薫博士が以下のように述べる通りである。20世紀に入って以来、国境など伝統と文化を隔離する境界線はいよいよ曖昧となっている。しかし人間の感情とそれによる芸術的な表現は、空間的距離の短縮に伴い一様化しているとは思われない。誤解、疎遠そして融合あるいは断絶は、個人間の交流からやがて国家民族の間の相互認識にまで発展して行き、新たな近現代文学の風景を織り成しているといえる。本研究は、交通手段とIT技術などが情報交換の効率を大きく向上させ、ネットがすでに文学を生み出す一つの有力な「場」となった現在の東アジア文化状況を念頭に、20世紀前半に日本、中国、台湾を旅行、留学、移住した知識人と文学者の足跡を、それぞれの文体と文学史的位置とに照らして「移動」の可能性と境界を考えるものである。

②研究概要 / Outline of Research

張文薫博士が以下のように述べる通りである。本研究を実行するには、これまでの日本における東アジア知識人の精神史研究を把握したうえ、作家たちの文学資料館、旅先や出身地の郷土資料館などで調査を行い、その移動した経緯と経験を実際のテキストとを対照する。さらに各地の文学関係者との交流をはかり、地域文学の成果と可能性について意見交換し、文学史的空間を拡張する必要がある。そのような過程において、小説のみでなく、ドキュメンタリー、ノンフィクションと文学の関連性を考えることも本研究の重点にしたい。

③研究成果 / Results of Research

張文薫博士が以下のように述べる通りである。今回は、日本近代文学館ほか、山梨県にある「三島由紀夫文学記念館」、「徳富蘇峰記念館」へ訪問[中略]鷗外の子息である森於菟が台湾帝国大学医学部在任中について描いたエッセイ『毫碌寸前』、台北高校卒業生の文集などを入手したことは、今回一番大きな成果だといえる。近代化と帝国主義の癒着関係は、植民地出身者の帝国巡礼および、帝国出身者の植民地経験の両側からアプローチすることができれば、一層「帝国」と「知識」の葛藤が明らかになる。」研究成果の一部は2014年7月19日東京大学文学部で東京台湾文学研究会が開催した夏期研究会および東大中文研究室と台湾大学台湾文学研究所が2014年9月27-29日に後者で共催した国際ワークショップで発表された。

④今後の計画 / Further Research Plan

張文薫博士と指導者が共に所属する日本台湾学会、東京台湾文学研究会を主な活動の場とし、指導者の科研費補助金国際共同研究「現代東アジア文学史の国際共同研究」(基盤研究(B)2013-16年度)を共同研究の軸として交流をとりながら、台湾の視点から見た東アジア文学史の執筆を進めて行く。



研究報告



受入研究者藤井省三教授及び研究者と共に

